剣地人 19

埼玉県北葛飾郡杉戸町

第25回昌平剣道大会

それぞれの思いで戦う中学生と、支える高校生。

平成29年7月30日（日）　文と写真＝鈴木智也

文武両道を謳う昌平高校は各運動部が全国大会で活躍、一方で進学や英語教育でも実績をあげている。大会は同校の体育館（写真下）で行なわれた。上層にメインのフロアがあり、1階部分に武道場がある

埼玉県の私立昌平高等学校が主催する昌平剣道大会が、25回目の節目を迎えた。大会は同校の体育館で行なわれる。夏休み中の校内には、全面人工芝のグラウンドを走るサッカー部員やユニフォーム姿の野球部員の姿があった。

昌平高校は埼玉県東部の北葛飾郡杉戸町にある。久喜市との境に近く、最寄り駅は東武日光線杉戸高野台駅だが、久喜駅から自転車で15分ほどかけて、あるいは直通バス（5分）で通学する生徒が多いという。昭和54年に東和大学附属昌平高校として創立されたが、平成19年に経営母体が変わって現校名となり特別進学コースを設置、現在は東京大学や京都大学合格者も出ている。平成22年には中学校が併設された。全国大会常連のバスケットボールや陸上競技など部活動は以前から盛んで、サッカーもここ数年で全国大会に駒を進めるようになった。

剣道部は今年で勤続30年という松岡和彦監督（教士七段）が創部者である加藤清文前監督（現学園顧問）から受け継ぐかたちで育ててきた。今年度は出場を逃したが関東高校剣道大会団体・個人に男女合わせて18回出場し女子が団体5位入賞。インターハイ男子個人出場、国体出場など、県内で上位の戦績を残してきている。

この大会は合同練習から発展し、平成5年に第1回目が開かれた。

「近隣の高校や中学で合同練習をしている内に、中学校の大会をやろうかということになりました。学園としても健全育成に貢献するということで認めてくれて、現在までバックアップしてくれており、参加費は取らない大会です」（松岡監督）

大会会長は城川雅士校長が務めている。

時期は秋や冬に行なったこともあったが、中体連の行事との関係で7月最後の日曜に落ち着いて10年以上が経つそうだ。今年の参加校は63校、男子62チーム、女子51チーム。5校が県外からの参加で、茨城、千葉など地理的に近い学校が多いが、東京から伝統校である荒川五中と、この大会の評判を聞いて初めて参加したという青梅二中が出場した。6日前に全国中学校大会と関東中学校大会の予選を兼ねた埼玉県学校総体中学校剣道大会が終わったばかりだが、男女で全中出場を決めた大沼中（春日部市）をはじめ、関東大会への出場が決まっている学校も出場している。

「全中大会や関東大会に出るチームはその調整のため、そうではない学校は3年生の引退試合として、あるいは1、2年生の新チームで出る学校もあります。言い方は変ですが『使い勝手のいい大会』なのだと思います」と松岡監督。

今年は梅雨に逆戻りしたかのような涼しい日だったが、これはとても珍しいことで、冷房のない体育館は例年暑さが厳しいという。暑さを考慮してか、昼食休憩時間も取られていた。体育館に続く校舎の冷房の効いた廊下が開放され、そこにシートを広げて陣地をつくり食事をとるチームが多かった。

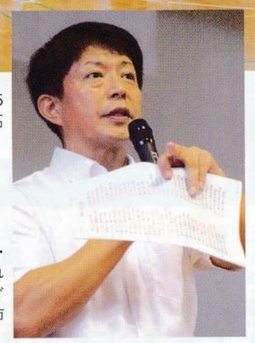
体育館に8試合場、体育館の1階にある武道場に2試合場が設けられ、計10試合場で試合が進行する。昌平高校の在学生をはじめ、OB会（剣昌会）、保護者会のメンバーが大会係員や審判員を務める。審判の組み合わせは中学校指導者＋OB＋高校生、あるいは高校生2名という場合もある。3年生はすでに引退して受験勉強に備えているが、この日だけはスタッフに加わるという。

上位の戦いでは、埼玉県大会を制しこの大会も昨年まで男女とも2連覇を果たしている王者・大沼中に対し、3校とも女子は関東大会出場を決め男子は逃している菖蒲中（久喜市）、栄進中（越谷市）、吉川南中（吉川市）が挑むかたちとなった。つねに大沼中の背中を追いかけてきたという菖蒲中は、男子が準決勝で大沼中に対し代表戦に持ち込み、女子は決勝で大沼中と対戦。ともに敗れたが「大沼中と剣を交えるラストチャンス」（橋本真奈美監督）という思いで臨んだ試合で気持ちのこもった戦いを見せた。

最近は冷房の効いた体育館での大会がほとんどなので、こんな暑い大会に参加

埼玉県内を中心に63の中学が参加。昌平高校剣道部員（背中）が審判や係員をつとめる

審判をつとめる昌平高校の部員



大会を創始し、25年続けてきた昌平高校の松岡和彦監督

優勝賞品は稽古着・袴の素材でつくられたテディベアのぬいぐるみ。埼玉県羽生市の小島染織工業製